山口学芸研究 第16号 2025年 pp.28～40

読み物資料に基づく道徳授業の考察（6）
価値「勤労」「集団生活の充実」に焦点を当てて

川野哲也

A Consideration of Moral Class Based on Reading Materials (6) : Focusing on the Value, “To Work” “Enriching Student Relationships”,

KAWANO Tetsuya

１．はじめに

子どもにとって、集団活動の中に身を置いて一定の役割を担うこと、責任ある立場でいくつかの仕事を引き受けることは重要な課題である。それが最終的には職業人として自立すること、地域社会の一員として社会の発展に貢献することにつながっていく。

文部科学省はキャリア教育の推進に取り組んできた。1999年の中央教育審議会答申「今後の初等中等教育と高等教育の接続の改善について」[1)]の中でキャリア教育の重要性が示され、その後2011年の中教審答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」[2)]ではキャリア教育の基本的な考え方がまとめられた。キャリア教育とは「一人一人の社会的・職業的自立に向け必要な基盤となる能力や態度を育てる」ことだとされる。必要な能力や態度として、基礎的・基本的な知識・技能、基礎的・汎用的能力、論理的思考力、創造力、意欲・態度及び価値観、専門的な知識・技能などが挙げられており、それらを踏まえて社会的自立、職業的自立につなげていくというのが、キャリア教育の視点である。いわば学校教育における全ての活動が何らかの形でキャリア教育に関連している、ということであろう。なお2017年の学習指導要領改訂の際、キャリア教育は特別活動を要として展開することが示され、さらに記録を蓄積して指導すること（キャリア・パスポートの使用）が求められた[3)]。

道徳教育もまた、本来は総合的な視点である（特別の教科道徳を要として、学校教育全体で達成されることになっている）。道徳教育とキャリア教育は、目指している資質能力に違いがあるが、指導のあり方そのものは類似している。三村隆男は、キャリア教育と道徳教育とを連携した形で実践していけば、それぞれの教育的効果を高めたり、補完的な実践が可能になったりすると考えた[4)]。また椋木香子は、両者は共通する点が多いため、関連づけながら指導すれば効果的に達成すると考えている[5)]。キャリア教育と道徳教育とを関連付ける試みは重要ではあるが、本論が考えたいのは関連性や共通性ではない。道徳授業としての特長である。キャリア教育を扱う道徳授業は、キャリア・パスポートを活用する特別活動とは違いがあるように思われる。道徳授業は子どもの認識をどのように広げたり深めたりするのか。その可能性の部分を明らかにしてみたい。

なお道徳授業が扱う価値項目のうち、キャリア教育あるいは社会的自立・職業的自立に深く関連するのは［勤労、公共の精神］であり、さらにそれに関連する［よりよい学校生活、集団生活の充実］である。それ以外にも［自由と責任］［個性の伸長］等も挙げることはできるが、とりあえず前の二つに絞って議論してみたい。これまでの筆者の検討[6)]から考えるに、おそらくは、

働くことの大切さがわかるとか、責任感をもって仕事をすることが大切だとか、そのような単純な話ではない。いっそう複雑な仕組み、一定の視野が広がり深まっていくような話だと思われる。それを本論では議論し検討していきたい。

本論では、まずは働くことについての各方面からの有意義な示唆を得る。そのうえで、道徳の読み物資料とそれを活用する授業のあり方について検討していく。最後にキャリア教育と道徳授業との関係を議論する。

２．働くことの重み

「働く」とはどういうことか。働くことについてどのような意味、重みを見出せるであろうか。多くの若者は、働くことを通して自分の夢や目標を達成する、自己実現するといったイメージを持つ。このことから取り上げよう。

自己実現であることをはっきり示した書がある。小説家の村上龍による『13歳のハローワーク』[7)]である。13歳と明記していることからも中学生を対象としていることが分かる。冒頭には「できるだけ多くの子どもたちに、自分に向いた仕事、自分にぴったりの仕事を見つけて欲しいと考えて、この本を作りました」とある。動物が好きであれば獣医師、星や宇宙が好きであれば宇宙飛行士、ダンスが好きならばダンサー、といった形で500以上の職業を紹介している。ここには、自分のやりたいことを仕事にする、あるいは自分が得意とすることを仕事にするという観点が示されている。池上彰監修の『なぜ僕らは働くのか』[8)]においても、なりたい職業、やりたい仕事の見つけ方、好きなことから仕事を見つける、得意なことから仕事を見つける、等の記述がある。

自分がやりたいこと、自分にできそうなことを仕事にするという観点は、文部科学省の方針にも含まれる。答申では「自己理解・自己管理能力」と表記される[9)]。自分ができること、意義を感じること、したいことについて主体的に行動する、とある。キャリア・パスポート（例示資料）[10)]でも「今の自分を見つめること」「こんな大人になりたいという目標を見出すこと」「なりたい自分になるために身につけること」等を記述する形が示されている。パスポートは、１年、２年と経っていく中で、身についたことを確認したり、さらに将来の自分を想像したり、さらに新しい目標を設定したりと、自分自身の成長を振り返るようになっている。キャリア教育の指導の場面では、自分の夢や目標を持つことは学びを深めていくための土台のような位置なのである。

自分の夢や目標を強調するという点についてはいくつかの批判もある。例えば、梅澤正は現在のキャリア教育あるいは若者の傾向に対して「やりたい仕事にとらわれすぎ」ではないかと問う[11)]。自分本位、現在本位になってしまい、自分探しに翻弄されてしまうのではないか。多くの人々はやりたい仕事ではない仕事につくが、そうであったとしても、やりがいを持つことはできると梅澤は指摘する。本田由紀は、キャリア教育が若者の不安や混乱を増大させてきたという可能性を指摘する[12)]。文部科学省がキャリア教育を推進してきた時期と、若者が「やりたいことがわからない」あるいは「それが実現できるかどうかわからない」という不安を募らせてきた時期が一致するという。うまくいかなくても自分で決めたことである。本田は、長引く不況や雇用状況の悪化を前に、学校側が進路についての責任を若者に投げ出しているのではないかと問う。

児美川孝一郎は、キャリア教育で「やりたいこと」を重視する傾向があると指摘した上で、これを批判する[13)]。子どもや若者は仕事や職業のことをよく知らない。それゆえ夢や目標を語らせると身近な職業（公務員）や専門職（先生、医者、看護師など）を挙げてしまう。あるいはイメージが先行する憧れのようなものを挙げてしまう。どうしても狭いものとならざるをえない。またキャリア教育は、やりたいこと、夢や目標を膨らませることには力を注ぐが、それが実現可能かどうか、それが社会的にどんな意味を持つかについては、熱心には考えない。不可能であるなら

ば諦めなければならないが、その指導は、やりづらい。そこに違和感があると児美川は指摘する。

自己実現という考え方が、若者の仕事の定着にとってマイナスに作用しているという見方もある。品川裕香によれば[14]、入社したらすぐに自分の好きなように働けて、すぐにやりがいが得られると思っているような者がいる（実際には多くの大変な仕事を覚え、自分でまわせるようになってから始めてやりがいを得るはずであるが）。働くということの意味を、自分の好きなこと、得意なことを活かし、自己実現として行うことだととらえる。そんな人は、まずは仕事を覚えるということができずに、上司や労働環境への不満を募らせる。義務や責任についての意識は薄い一方で、権利意識は強い。すぐに仕事をやめ、なかなか定着しないという。

働くとはどういうことか。夢や目標の実現、あるいは自己実現という視点は一つの重要な視点ではあるが、上記の議論を踏まえるならば、一度そこから離れた方がよさそうである。改めて考えてみたい。基本的にはそれが職業として成り立っている以上、働くことには意味がある。それは貴いこと、重みのあることである。しかしそれを労働者がどのように感じるのか。働くことのやりがい、あるいは充実感や達成感をどのように見出せばよいか。それを明確にしておくことが重要である。いくつかの資料から抜き出してみたい。

古い書物にはなるが、黒井千次の議論は興味深い[15]。黒井は製造業をイメージして議論している。人は仕事を与えられた際に、会社という組織の中でどの部分を担当しているかを知りたいはずである。しかし大半は仕事全体が見えているわけではなく、一部の作業を担当している。単純な反復作業であることが多い。自分の担当が完成品、生産物にどのように関連しているか、役割、重みが分かるとよい。それが意義である。細分化すれば能率は上がるかもしれないが、働く人にとっては作業の意義が見出せなくなり、疲労となる。働きがいが感じられなくなるのである。与えられた仕事であったとしても、その仕事の中に自分の熱い思いを見出していくとよい。仕事でなしとげたものが、自分自身であると、黒井は示す。

田坂広志の議論も重要である[16]。田坂はビジネスマンを想定して議論する。ビジネスにおいては、日本一の会社にしたい、自分のプロジェクトをなんとか成功させたいという熱い思いは大切である。ビジネスでは顧客の思いに共感することから始めるとよい。顧客を手段や道具のようにとらえ、こちらの目標に向けて顧客を操作しようとすればうまくいかなくなる。顧客がこちらに対して厳しく不満を向けてくれればそれをきっかけに改善、成長できる。仕事が少しずつうまくいくようになれば、自己の能力は向上し、さらにそれまでできなかったことができるようになってくる。能力が認められると、それだけ頼られることも増え、仕事も増えてくる。自分にとって満足するだけでなく、顧客にとっても、会社にとっても満足となる。それこそがやりがいだと田坂は指摘する。

前川孝雄は、会社における「働きがい」のあるチームの作り方を提案する[17]。それによれば、「やらされ感」をなくすこと、自律意識を持つことが大切だという。チームへの参加や貢献のために、自分でできることを自分で考え、自分でやると決めて取り組む。単純な作業ではなく、目的に対して工夫して作業をする。その工夫によってよい成果が得られ、顧客が喜び、同僚に認められていくことで「やりがい」を感じる。さらにメンバーのそれぞれの能力や特性を活かして、お互いが尊重し合っていけば、チームに活気が生まれチームは強くなると前川は議論する。

先に取り上げた池上彰監修の『なぜ僕らは働くのか』には、働きがいや充実感についての記載もある[18]。作業としては同じ仕事をするにしても、目的や意義を理解する場合とそうでない場合では大きく異なること、責任感を持って自律的に考えながら取り組むことで仕事がうまくいくこと、等の説明がある。

以上「働きがい」「充実感」について取り上げてきたが、現代的な意味においては、それらはなかなか厳しい状況となっているかもしれない。長引く不景気の中で、低賃金、長時間労働など

過酷な労働環境となっている企業も少なくない。業務内容が複雑化し、ICT、AIが頻繁に用いられる時代である。細分化された仕事内容をマニュアルに従い、正確に遂行することが求められている。そうなればますます働きがいは得られずに、ストレスの多いものとなるであろう。

労働の場では得られない「やりがい」を、ボランティア活動において見出す人々もいる。ボランティアの社会的な位置づけは大きく変わってきている。現在では、学校支援、貧困問題の解決(子ども食堂など)、地域イベントの開催、防犯、防災、災害復興、地球環境保全、国際協力など、様々な分野でボランティア活動が行われている[19)]。長年ボランティア活動にかかわってきた田中優は、ボランティアの意味について示している[20)]。ボランティアはいやいやながら、苦痛を感じながら取り組むものではない。基本的には楽しいからやる。誰かに頼まれるものではなく、自発的にやる。「やらされている」と感じた時は疲れる。逆に、好きでやっている時は疲れないのである。活動において、こんな自分でも人の役に立つことがある、役に立つことができるという実感を得る。勿論、自分の安心感だけで終わってはならない。相手が幸福を感じる、希望をもって過ごせるというのがボランティア活動の目的である。誰かの役に立っていると思えばうれしくなる。

ボランティアには、活動に参加する前の強い問題意識や使命感が必要であるかのように思われがちであるが、実際はそうではない。この点で猪瀬浩平の議論が参考になる[21)]。ボランティア活動には必ずしも使命感がなくてもよい。たいした理由はなくてもよい。なんとなくなりゆきで参加してしまった、という程度でもよい。重要なことは、かかわりが存在することである。課題を前にして人々がつながっていく、関係がひろがっていく。課題に対してはそれぞれの能力に応じて貢献すればよい。それが楽しさである。もしその活動が、決められたことを遂行するだけのものになってしまうと、熱が冷めてしまう。気づきや、批判や、その時その時の思いを大切にすることが「自主性」だと猪瀬は指摘する。

ここまでの議論を整理してみよう。

仕事に充実する前の時点で、将来の夢や目標、自分らしさ、自分の得意なことを明確にするようなキャリア教育が行われているが、かえって若者の不安を煽ったり、迷わせたりしているようである。いったんその話は横においておき、仕事のやりがいや充実感について明らかにするとよい。仕事のやりがい、充実感、達成感とはどういうものか。まずは誰かの役に立ったという成果からくる。しかしそれだけではない。私たちは、課題に向き合いながら、これでよいのかと自問自答しながら、他者の思いに寄り添いながら、工夫と試行錯誤を重ねながら、仕事をする。自分の思いが周囲の人々に届いた時、そこに「やりがい」を見出せるのである。現代社会においては、労働よりもむしろボランティア活動の中で見出せるかもしれない。ボランティア活動は金銭的代償を受け取る労働ではないが、労働の時のような充実感、やりがいを得ることができるようである。

３．勤労および仕事についての道徳授業

以上のことを踏まえた上で、道徳授業について検討したい。読み物資料を取り上げ、道徳授業のあり方を議論しよう。まずは勤労および仕事を扱う内容である。ここでは、仕事をする大人が登場する。その生きざまを、読者である子どもが迫っていく。

最初に取り上げるのは「母の仕事」[22)] である。概要は以下の通りである。

ひろ子の母は、腰のマッサージを娘に頼む。身体を使う仕事のようである。ひろ子は、そんなにきついなら仕事をやめればいいのにと言ってしまう。母はひろ子に仕事の話をして聞かせる。

ひろ子の母は看護師であり、入浴サービスの仕事を担当している。ねたきりの人の入浴を手伝い、健康状態を調べる。体調優先のため入浴できないこともある。利用者は入浴の日を心待ちにしている。母はそれらを笑顔で語る。

この資料は、働くことの意味を十分に理解できていないひろ子と、働くことの充実感を得ている母親との会話である。授業では、まずはひろ子の素朴な思いを明らかにし、ひろ子の思いに共感していく。村中浩二の提案授業[23] では「ひろ子はどんな気持ちだったか」という問いで、「毎日こんなにくたくたになるまで働いてかわいそう」「仕事をやめないと体をこわしてしまうよ」「もっと楽な仕事をすればいいの」という答えを導く。その後は、母の仕事について掘り下げていくことになる。村中の授業では「お母さんはお金のためにだけ働いているのでしょうか」と発問する。子どもたちは「お金も大切だけど、人を助けるために働いている」「年長者の方が喜んでいるのが自分もうれしいから働いている」「仕事に誇りをもっていて、待っている人も喜んでくれるからお金のために働いてはいない」等の答えを出していく。

中野学の指導案[24] では、サービスを利用する人々の思いを問う。すなわち「お年寄りの人たちは、お母さんが来るのをどのような気持ちで待っていたのでしょう」という問いである。子どもたちからは、「早く来てくれないかな」「感謝の気持ちでいっぱい。ありがたい」といった答えを引き出している。ここで明らかにしようとしているのは、母の仕事は、お年寄りたちに感謝される仕事であり、役に立つ仕事だという点である。

村中や中野の授業案にあるのは、「客が感謝すること＝働く人のやりがい」という視野である。どんなに大変で苦しい仕事であっても、客が喜び満足するのであれば、やりがいになるというとらえ方だと言えよう。それは正しい見方ではあるのだが、これでは働き手の試行錯誤や工夫といった部分が十分に見えてこない。読み物資料には、入浴する人の健康状態に合わせて試行錯誤するという点、また母親の心配や思いが利用者に伝わり、それがまた返ってくるという共感的なやりとりもある。資料に詳細は書かれていないが、他のスタッフと日常的な会話をしたり、一緒に考えたり工夫したりするような場面もあると推察される。

そう考えると加藤宣行の指導[25] はとても興味深い。加藤の授業では「ひろこのお母さんは、どうして大変な仕事を続けることができるのだろうか」と発問する。現在から過去に遡及するような発問である。そこに何かがあったはずという前提での問いであり、母の努力や工夫をも想像するような機会となっている。子どもからは「疲れるけど、それだけのことをしたんだという達成感」「自分にしかできない仕事をしたというプライド」「同じ仕事でもいろいろ工夫してやると思う」等の示唆に富む答えが返ってきている。働く人が、様々なことに気づき、寄り添い、自分なりに試行錯誤することに目を向けようとしており、その点で加藤の実践は評価できる。

次に取り上げるのは、読み物資料「明かりの下の燭台」[26] である。中学生対象の資料である。概要は以下の通りである。

1964年の東京オリンピックで日本代表のバレーボールチームの監督をつとめた大松さんの話である。大松さんは選手であった鈴木恵美子にマネージャーの仕事を頼んだ。鈴木は、本当はバレーボールがしたかった、マネージャーはいやだった。しかし身長が低かったこともあり、チームを強くするためにマネージャーの仕事を引き受けた。それから鈴木は、選手15人の世話を４年間、無休で続けた。各選手にあった食事を用意し、片付けや洗濯もこなした。オリンピックでは金メダルを取ることができた。チームが強くなったのは鈴木のお陰だったと大松さんは考える。

本資料は、本当はやりたくなかったマネージャーの仕事を最後まで献身的にやりとげるという

話である。村田寿美子の提案授業[27] では、「恵美子を４年間支えてきたものは、何だったのでしょう」と発問する。子どもからは、「チームのメンバーから信頼されている実感」「みんなから感謝される喜び」「監督に認めてもらえているという思い」「自分の仕事に誇りをもってやり遂げたいという人間としてのプライド」等の答えを引き出している。

「恵美子を支えてきたもの」という問いは、選手や監督が恵美子を支えた、という見方に向かうであろう。それは確かなことではある。しかしここで重要なことは、鈴木がどのような点で頑張ってきたかという点ではないだろうか。鈴木は様々な工夫や試行錯誤を重ねている。選手一人ひとりの好き嫌いに配慮した食事、選手の動きに合わせた洗濯や片付け、移動中のお菓子や雑誌の準備など、鈴木の気配りは細かい。歌が上手い、怒らない、よく笑うといった人柄も重要である。「美恵子を支えたもの」を問えば、周囲の人々の姿に焦点が当てられてしまい、重要な部分が隠れてしまうように思われる。

若林尚子の事例[28] では、鈴木が葛藤の末マネージャーを引き受けたという時点に焦点を当て、「断る」という選択と、「引き受ける」という選択を挙げ、その内容を明らかにしていく。「断る」という選択肢の背景には「選手として活躍したい」「夢を実現するために努力することは大切」といった思いがある。「引き受ける」という選択肢の背景には「チームのためになる」「集団として協力する」といった思いがある。若林の授業はその後、４年間が終わった時点に目を向け、「悔しさがないわけではない中、４年間楽しかったと思えるのはなぜでしょう」と問う。子どもからは「自分にできることで優勝に貢献しようと決めた」「チームの一員であると感じられた」等の答えを引き出そうとする。この若林の観点は重要である。鈴木はバレーの選手になるための努力をしてきたのであって、マネージャーとしての知識や技能を持ち合わせているわけではない。当初の自分の夢や目標を捨てたにもかかわらず、最終的には４年間楽しかったと言えたのである。それはなぜかと問うことには意味がある。若林の提案ではあまり深く議論されていないが、鈴木が、与えられた環境の中で新しい形の夢や目標を見出していけたからではないか。その姿勢は、働く上で大切なことである。

さて、最後に取り上げるのは読み物資料「あるレジ打ちの女性」[29] である。中学生対象の資料である。概要は以下である。

転職を続けるある女性の話である。いやなことがあるとすぐにやめてしまう。この女性がスーパーのレジ打ちの仕事を始めた。この仕事も続きそうにない。仕事をやめて田舎の実家に帰ろうと思っていた際、子どもの頃の夢を思い出す。それからこの女性は、逃げずに頑張ってみようと思う。客との会話ができるようになり、レジ打ちの仕事にやりがいを見出していく。その後、客が自分のことを意識していてくれたことに気づき、涙を流す。

仕事がうまくいかないという状況から、仕事がうまくいくようになったという状況の変化が描かれている話である。まずは島方勝弘の提案授業[30] を見てみよう。島方は「辞表を書き、田舎に戻るつもりで部屋を片付け始めていたときの女性のレジ打ちの仕事に対する考えや気持ちは」と問う。子どもからは「自分のやりたい仕事だと思っていない」「もっと楽しい仕事がしたい」「ただやらされているだけのやりがいを感じない退屈な仕事だな」等という声を引き出す。後半では、「泣き崩れたまま、レジを打つことができなかった女性が気づいた『仕事の素晴らしさ』とはどんなこと？」と問う。子どもからは「面倒くさいと思ったことも頑張ってやれば自然と楽しくなり視野が広がること」「どんな仕事でも一所懸命やっていれば、自分は必要とされる。信頼されること」「お客さんやお店の役に立ててよかった」等という答えを引き出そうとする。最後に生徒がまとめた感想では、「何事にも一所懸命になってあきらめずに続けていれば良いことが

ある」「もしつまらないと思っていることがあっても、続けてやることで楽しさや達成感を感じられる」等が挙げられる。

ここで明らかになっていることは、ひたすら頑張って仕事に取り組んでいくことによって、余裕が生まれ楽しくなってくるという図式である。この図式は、いささか狭いように思われる。なぜこの女性がうまくいったのか。筆者の解釈では、レジ打ちを頑張ったからというよりはむしろ、自分なりに楽しみを見出したということである。この女性は、マニュアルに従ってレジ打ちを効率的に素早く行ったのではない。自ら工夫して自分なりのやり方を追求したのである。また買い物客のニーズに対応したというよりはむしろ、客に対して一人の人間として向き合った、ということである。その部分に目を向けていくことが重要だと思われる。しかしながら島方の授業では、その微妙な試行錯誤は見えなくなり、お客が喜んだ、お客が求めてくれた、という成果の部分ばかりが焦点化されてしまう。それでは重要な部分が隠れてしまうのではないか。

そこで重野典子の実践[31] である。重野は後半の内容についていくつかの問いを重ねていく。「仕事が楽しくなってきたのはなぜ？」と問う。この問いは重要だと思われる。「レジ打ちを極める」「お客さんが見える」「毎日が違う」等の答えを引き出す。この議論の先を深めていけば、よい議論となっていくに違いない。重野は「どうしてこんなに泣き崩れたのでしょうか」と問い、「自分が必要とされていることに嬉しい」「自分で自分を変えられたことで人に喜んでもらえている達成感」等という答えを引き出す。

おそらく仕事のやりがいとか、充実さというのは、微視的なものである。うまくいかない現実に対して、小さな工夫や試行錯誤を重ねていくことであり、そこで出会う様々な人々の思いを受け取ることであり、人々に共感して喜んだりするようなことだと思われる。おそらくその全体が重要なのである。それゆえ授業では、最終的に主人公が達成感を得た地点に立ち、なぜ嬉しかったのかと問うことで、それまでの微視的な努力や工夫の全てが視野に入ってくるのではないだろうか。

４．集団活動および奉仕活動についての道徳授業

子どもは現実社会において労働をすることはできないが、学校や地域において一定の仕事を担うことは可能である。少しずつ参加していく子どもの姿が描かれる。

まずは学校生活での参加を描く「森の絵」[32] である。

えり子のクラスでは学習発表会で劇をすることになった。えり子は、最初は女王の役をしようと思うが、めぐみの演技が上手だということから女王役をめぐみに譲り、自分は別の役を選ぶ。めぐみの練習風景を見て感心する。えり子は道具係を担当した。それから準備に入るが、えり子はなかなか力が入らない。隣で衣装係の文男が苦手ながら頑張っている。めぐみは音楽の準備を手伝っている。それらを見て、えり子はやる気を出していく。

前半ではやる気を失ってしまったえり子が描かれ、後半では周囲の姿を見ながらやる気を取り戻していくえり子の姿が描かれる。山本浩貴の実践[33] は分かりやすい。山本はえり子の気持ちの変化をたどる。前半のえり子の気持ちはどういうものかという問いに対して、子どもたちからは「本当は女王がしたかった」「あまりやる気にならないな」「怠けたいわけではないのだけれども」という答えを引き出す。文男の言動に対してえり子がどんな気持ちになったのかという問いに対しては「自分は甘かったな」「文男はすごいな」等の答えを引き出す。最後に、どんな気持ちになっているかと問うて、「成功させるためにできることをしたい」「みんなの役に立つのはうれしいな」等という答えを引き出そうとしている。他の実践例もほぼ同じような展開になってい

る[34]。

上記の授業の流れは、物語の人物の思いをたどるというものであり、いささか表面的であるように思われる。筆者の解釈ではあるが、えり子が意欲を失った理由は重要である。厳密に言えば、えり子は当初、やる気がなかったわけではない。やりたかった役を、演技の上手なめぐみに譲っている。おそらくえり子は、適材適所、能力に応じた仕事というイメージを持ってしまったのであろう。それゆえ自分の居場所がないという感覚に陥ってしまったのである。この姿勢はあまりよいものではない。もし皆で一緒に何かを成し遂げたいのであれば、自分の得意なことや能力などはあまり気にしない方がよい。細かな思案をせずに、みなで楽しい雰囲気を作ってその中で楽しめば良い。大切なことは、お互いに声をかけあって楽しむということである。文男の姿はそれを示している。全体の温かい雰囲気を作りながら、盛り上げていくことが必要である。

そう考えると、酒井真依の実践[35]は興味深い。酒井は、素敵だなあと思う集団とはどういうものかという問いかけで授業を進める。酒井は子どもたちの議論に委ねつつ重要なフォローをしていく。「文男みたいな人がいっぱいいたら素敵な集団になるよね？」等と声をかけていく。学級の集団には譲り合いの精神が大切ではあるが、それだけではうまくいかない。文男のような励ましがあるとやる気が出てくるという点に焦点を当てていく。

次は「子ども会のキャンプ」[36]である。同じ地区の異年齢の子どもたちが集まる地域活動である。

２泊３日の子ども会のキャンプの話である。明葉は、６年生として班長となる。３年生のむつみが、カレーの鍋を倒してしまった。明葉は、むつみをなぐさめ、周囲の子にも声をかけていく。カレーは他の班の子に頼んで分けてもらった。むつみには謝るよう促し、事態を収拾する。世話役の大学生は、明葉を褒めていく。

この資料については小中理司の実践[37]がある。ここではカレー鍋をこぼした際の人物の心境を明らかにする。その上で、「明葉が、逃げ出さずに、頭を下げてカレーをもらってきたり、むつみと一緒に謝ったりしたのはどんな思いからでしょうか」という問いを掲げる。子どもからは「自分が大変でもみんなが楽しめるキャンプにしたいし、それが班長としての責任」「逃げ出したいところだけど、やっぱり困っている人やみんなを救うのが自分の責任」等と言う答えを引き出す。責任を果たすという点に焦点があてられる。

この資料は仕事をする上での重要な視点を多く含んでいるように思われる。筆者の解釈であるが、ここで主人公は複雑なことを同時に考えて行動している。驚きや悲しみといったメンバー全員に気持ちを察知し、このままでは楽しいキャンプではなくなってしまうという危機意識を持ち、急いでメンバーに声をかけてなんとかしてまとめていこうとしている。キャンプを楽しむという目標に向けて、こぼれたものは急いで処理しなければならないし、落ち込んでいる子には声をかけなければならない。もやもやした気持ちを引っ張らないように一言謝って、次の気持ちへと切り替えなければならない。小中の授業案における「どんな思いからこの行動に出たのか」という問いでは、活動の前段階の意識の方に焦点化されてしまう。それでは少しずれてしまうように思われる。活動の中で主人公は「どんなことを心配しただろうか」「どんな配慮をしただろうか」と問い、様々な心配を明らかにしていくとよいのではないか。その姿勢は仕事をする上でも大切なことである。

最後は「町内会デビュー」[38]である。中学生対象の資料である。概要は以下の通りである。

その地区の町内会で、各家庭から１人ずつ出して立木の伐採、草刈り作業をすることが決まった。いつもは父が参加していたが、父が仕事で参加できず、今回は中学生の明君が参加する。明

君がしぶしぶ参加すると、地域の大人たちが声をかけてくれた。作業は大変だったが、慣れてくるとペースも上がる。かなりの重労働だと感じる。終わった後では大人たちに感謝される。明は、自分が大人になったような気持ちになる。翌日、登校に際して、地域の方から声をかけてもらう。

いやいやながら地域行事に参加している状況から、しだいに意欲的に参加するようになるという話である。この資料について松原弘の先行事例[39]がある。松原は、主人公の思いを一つひとつ丁寧に確認していく。最初の段階ではどんな心境か。「なんで僕が出なきゃならないんだ。部活もあるのに」「大人の中で自分だけ中学生なのは嫌だなあ」という答えを引き出す。作業に参加している最中はどんな心境か。「町内会の周りの人たちが声をかけてくれたのでほっとした」「草の刈り方を教わったり、褒めてもらえてやる気が出た」という答えを引き出す。その後やる気を出してからはどんな心境か。「力の要りそうな仕事なのでお年寄りより自分がやった方がいい」「若い自分がやった方が役にたつし、みんなのためになる」という答えを引き出す。

改めて、働きがい、やりがいとはどういうものか。筆者の解釈では、作業を始めた際には、戸惑ったり、間違えたりするであろうが、しだい手順やこつを覚える。慣れてくるとスピードがあがり、成果を上げていく。同じ作業をしている周囲の人々の動きまで見えてくる。周囲の人々に声をかけあい、満たされる気持ちになっていき、最後には一体感のようなものを得る。この全てのプロセスを指して、良い経験だった、充実していた、という感想になる。松原のように一つひとつの思いを確認してもよいのだが、最終的にはどこかで、全体として良い経験だったということ、やりがいがうまれたという点を明らかにできるとよい。

この資料については、星美由紀の実践事例もある[40]。そこでは主人公の思いではなく、地域住民の心境に焦点を当てていく。授業では地域の方をゲストティーチャーとして招いてその方の思いを聞いていく。地域住民が、罰があるわけでもないのに休日に集まる動機は何か。「地域をよくしたい」「地域行事に参加するのは結局のところ、自分たちのためになる」「若い人がいるとこっちまで元気になれる」という声が聞かれる。授業では、人々との絆、自分のため、お互いを知ることによる安心感などに着目させている。勿論、地域の方の意見を聞くことそのものは重要なことではあるが、成果の部分だけに焦点を当てると「やりがい」の中身が見えにくくなるように思われる。

５．考察

仕事をすることのやりがい、充実とは何か。仕事の前、活動に参加する前の段階でいだいた思いや理想が決定的なのではない。仕事の全体像や目的を踏まえて課題一つひとつをこなしていくこと、他者の思いに共感し、悩みながらも工夫と試行錯誤を重ねること、達成や成功を喜ぶということ、さらには自己も成長し、関係者が全体としてよりよくなっていく。それこそが仕事をすることのやりがいである。現在では労働よりもむしろボランティア活動において見出せるかもしれない。

道徳の読み物資料は、充実した労働をすること、ボランティアに従事すること、学校の仕事を担うことについて取り上げている。試行錯誤、努力と工夫によって少しずつ状況が改善され、最後には十分な達成や成果を得るという姿が描かれている。適切な資料だと言えよう。活動に入る前（仕事に従事する前）の段階でいだいていた夢や理想、能力や意欲というものは、あまり重要ではない。むしろ活動場面でどんな工夫、努力をしたかが重要である。それが周囲に伝わっていき、やりがいや充実感となる。先行実践およびその指導案においては、役に立ったこと、客が喜んだことなどの成果に目が向きがちであるが、若干焦点をずらすとよい。与えられた仕事の中で、一つひとつ課題に向き合い、試行錯誤と工夫の上で取り組んだことが重要であり、子どもは

そこに目を向けるとよいであろう。本稿では、先行実践例を検討しながら、その改善について議論できた。

道徳授業の問いのあり方は、大きく三つあると考えられる[41)]。

①「人物はどのような心情か」

②「人物はどのような行動をとるべきか」

③「人物がそうしたのはなぜか、人物がそうすべきなのはなぜか」

①は、道徳授業の基本的な問いである。子どもからは「難しかった」「嬉しかった」「楽しかった」といった気持ちを答えて終わってしまいがちである。しかし授業ではいっそう深めていけるとよい。本論で取り上げてきたように、主人公が何をしようとしたか、どんなことを模索したか、どんなことを心掛けたか、その試行錯誤の部分、工夫や努力の部分を明らかにしていくことが重要である。

③の問いである。理由や背景に目を向ける問いである。本論で取り上げたように、主人公の意識が変わったのはなぜか。なぜ良かったと感じたのか。なぜ充実している気持ちになったのかを明らかにするとよい。たんに顧客が満足した、役に立ったという成果だけではない。迷い悩みながらも取組み、工夫や試行錯誤を重ねたり、他者の気持ちに寄り添っていったりしてきたという過程の全体が見えてくるとよい。それが周囲に伝わっていくことが、仕事をすることのやりがい、仕事をすることの充実さなのである。道徳授業においては、③の問いが、重要だと言える。

さて問題は②である。主人公はどうするべきか、あるいは、あなたならばどうするかという問いである。道徳教育の研究者の中には②を奨励する者がいる[42)]。このことについてどのようにとらえればよいか。どうするべきかという問いは、主体的な判断を促すような問いであり、一見したところ未来志向の適切な問いであるように見える。しかし本論で扱う「仕事」「集団生活」といったテーマについてはどうだろうか。多くの子どもは集団生活や社会生活を充実して送っているわけではない。キャンプでリーダー的に活動する子、地域の清掃を積極的に参加している子もいるであろうが、それほど多いとは思えない。子どもたちに「どうするべきか」と問うても、子どもはピンとこないだろう。「めんどうだからイヤだ」「僕はボランティアには興味がない」「もし僕が主人公だったらボランティアにはいかない」と答えても不思議ではない。どのようにするべきか、あなたが決めなさいと問うていけば、子どもはその時点での経験量の中で判断することになる。真剣に考えれば考えるほど、あれこれ思案すればするほど億劫になる。大変な仕事を引き受けて、失敗、迷惑をもたらす気にはならないであろう。あるいは、真剣に考えることをやめて、ああすればよい、こうすればよいと模範的な内容を無責任に発言するということもできるが、それはあまりよいことではない。そう考えるならば、本論のテーマにおいては、②の問いは重要だとは言えない。

道徳の読み物資料は、充実した労働をすること、ボランティアに従事すること、学校の仕事を担うことについて取り上げている。それらは、実体験の少ない子どもにとっては、いまひとつ理解できないところである。子どもの本音としては、出来ることなら負担したくない、やりたくない、責任を負いたくないというところであろう。読み物資料が描いているのは、大変ではあるけれども集団や社会の中で充実した生活をしている子どもや大人の姿である。読み物資料は、ある一定の価値に基づいた行動を提案しているわけではない。例えば、積極的に働くべきである、地域社会へ参加するべきである、リーダーとしての義務を果たすべきである、いったん引き受けた仕事は最後まで全うするべきである、などを求めているわけではない。もっとゆったりしたメッセージである。最初はイヤかもしれないが、やってみると充実しているよ、とでも語り掛けているかのようである。

以上のことを踏まえると、道徳の資料をめぐって二つの生き方が対峙しているように思われ

る。一つは自分の満足を優先し、困難なことや大変なことは出来るだけ避けようとする生き方、一つは集団や社会の中に身を投じて苦しみと喜びを両方得ようとする生き方である。整理すると**図表**のようになる。

小さな自己	大きな自己
・迷惑をかけないようにする。	・迷惑をかけてもあまり気にしない。
・他者とのかかわりを避ける。	・他者とのかかわりに身を投じる。
・仕事とは、苦役である。	・仕事とは、試行錯誤や工夫である。
・責任や義務は、狭い範囲がよい。 失敗は、したくない。	・責任や義務を進んで背負う。 失敗は乗り越えたい。
・自分の満足を大切にしたい。	・他者と喜びを共有したい。

図表　小さな自己と大きな自己

子どもの多くは「小さい自己」であると推察される。小さい自己にとって、仕事は大変な苦労でしかない。義務的であり、徒労であり、負担である。真に自分がやりたかったことなら仕事にしたいが、そうでないならば働きたくない、そんな思いであろう（夢や目標にこだわるのはそんな思いからか)。そんな子どもに対して、もっと大きな存在になろうよ、大変かもしれないが充実しているよ、と提案するのが道徳の授業である。道徳授業が促しているのは、自分の夢とか、自分らしさとか、自分に向いている等のことは深く考えなくてよい、ということである。失敗を怖がるのではなく、自信がないことや興味がないことでもとりあえず参加してみようという姿勢である。やる気は、他者との具体的なかかわりの中で醸成されるものであり、試行錯誤や工夫を重ねる中でやりがいや充実感を得るのである。

上記の図式は、分かりやすくまとめたものであり、現実にはその中間もあって明確に二分できるものではない。また、子どもがこうした提案を聞いたからといってすぐに行動できるものではない。二つの人生をじっくり眺めて、よく考え、少しずつ自分の人生に重ねていく。小さい自己から大きな自己への変容を求めていくのが、道徳授業の視点である。それが身につくかどうかは、その後の本人の経験次第だと言えよう。

さて最後に、キャリア教育と道徳授業との関係を整理してみたい。キャリア教育は、自分の夢や目標、自分らしさを明確に位置付けていき、様々な知識や概念を習得しつつ最終的には自分の人生をプランニングしていくことに目が向く。その職業が自分の能力や性格に合っているかどうかを考え、将来の自分の姿を意識していく。その一方で、道徳の授業は、特に働くことの意義や充実に目を向けていく。読み物資料の内容から言ってもそれが妥当である。ここでは自分の姿や自分の生き方からいったん離れてよい。当初の夢や目標とは無関係の仕事であっても、その中で働く意義を見出していけるはずである。道徳授業の際に、自分らしさを考えたり、自分の夢や目標を明確化してしまうと、むしろ深い学びが阻害されてしまうように思われる。このあたりの違いを明確にとらえることが重要である。

＜注および参考文献＞

１）中央教育審議会答申「今後の初等中等教育と高等教育の接続の改善について」1999年。
２）中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」2011年。
３）文部科学省『平成29年度　小学校学習指導要領』「総則」には「特別活動を要としつつ各教科等の特質に応じて、キャリア教育の充実を図ること」と記載されている。また「特別活動」の「内容の取扱い」には「児童が活動を記録し蓄積する教材等を活用すること」と記載されている。（中学校

も同様）なお、キャリア・パスポートについては文部科学省HP参照。
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/career/detail/1312382_00004.htm (2025.1.12)
４）三村隆男編著『キャリア教育と道徳教育で学校を変える!　コラボレーションによる授業改革』実業之日本社、2006年。
５）椋木香子「道徳教育はキャリア教育にどう応えるか　課題と可能性」『道徳と教育』第342号、日本道徳教育学会、2023年、pp.113-122。
６）川野哲也「読み物資料に基づく道徳授業の考察（１）　価値『誠実』に焦点を当てて」『山口学芸研究』第８号、2017年、pp.1-14。
７）村上龍著、はまのゆか絵『13歳のハローワーク』幻冬舎、2003年。100万部を超えるベストセラーとなり、2010年には89の職業を追加した新版も発行された。公式サイトもあり、現在でも活用されているようである。
https://www.13hw.com/home/index.html (2025.1.12)
８）池上彰監修、佳奈絵『なぜ僕らは働くのか』学研プラス、2020年。50万部を超えるベストセラーとなった。
９）中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」2011年。ここでは、基礎的・汎用的能力として、「人間関係形成能力・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」の４つが挙げられる。
10）キャリア・パスポート（例示資料）中学校。
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/career/detail/1419917.htm (2025.1.12)
11）梅澤正著『職業とは何か』講談社現代新書、2008年、pp.14-36。
12）本田由紀著『教育の職業的意義』ちくま新書、2009年、４章。
13）児美川孝一郎著『キャリア教育のウソ』ちくまプリマー新書、2013年、pp.63-88。
14）品川裕香著『「働く」ために必要なこと』ちくまプリマー新書、2013年、１章。
15）黒井千次著『働くということ　実社会との出会い』講談社現代新書、1982年、５章および７章。
16）田坂広志著『仕事の思想』PHP文庫、2003年、２話～５話。
17）前川孝雄著『「働きがいあふれる」チームのつくり方』ベスト新書、2016年、６章。
18）池上、前掲書、４章「幸せに働くってどういうこと？」の中に、仕事がうまくいくということはどういうことかについて説明がある。「働きがい」「充実感」といった言葉は使用されていないが、それに近い内容であると解釈できる。
19）江田英里香編著『ボランティア解体新書』木立の文庫、2019年。
20）田中優著『幸せを届けるボランティア　不幸を招くボランティア』河出書房新社、2010年、第２章。
21）猪瀬浩平著『ボランティアってなんだっけ?』岩波ブックレット、2020年。
22）牧直美「母の仕事」『生きる力６』日本文教出版、道徳教科書。
23）村中浩二「仕事に対して喜びや誇りをもち、働くことの意義を自覚し、進んで社会に役立とうとする心をもった児童を育てる」赤堀博行編集、筒井鉄也編集協力『道徳授業の定石事典　高学年編』明治図書、2012年、pp.155-162。
24）中野学「母の仕事」赤堀博行編著『小学校　考え、議論する道徳科授業の新展開　高学年』東洋館出版、2018年、pp.170-173。
25）加藤宣行「仕事のやりがいについて考えよう」押谷由夫編『アクティブラーニングを位置付けた小学校　特別の教科　道徳の授業プラン』明治図書、2017年、pp.90-93。
26）大松博文「明かりの下の燭台」『中学生の道徳２』あかつき廣済堂、副読本。（なお原典は、大松博文『なせば成る！　続おれについてこい』講談社、1964年。）
27）村田寿美子「明かりの下の燭台」柴原弘志編著『中学校３年の道徳授業　35時間のすべて』明治図書、2019年、pp.112-115。
28）若林尚子「よりよい集団のあるべき姿」柳沼良太ほか編著『生徒が本気になる問題解決的な道徳授業　中学校』図書文化、2018年、pp.82-87。
29）木下晴弘「あるレジ打ちの女性」『中学道徳　あすを生きる　３』日本文教出版、道徳教科書。（原典は、木下晴弘著『涙の数だけ大きくなれる！』フォレスト出版、2008年。）
30）島方勝弘「勤労」鈴木明雄編『主体的対話的で深い学びを実現する　中学校「道徳科」授業』教育開発研究所、2019年、pp.122-125。
31）重野典子「あるレジ打ちの女性」柴原弘志編著『中学校３年の道徳授業　35時間のすべて』明治図書、2019年、pp.104-107。

32）塚野征「森の絵」『小学道徳　はばたこう明日へ６』教育出版、道徳教科書。
33）山本浩貴「森の絵」赤堀博行編著『小学校　考え、議論する道徳科授業の新展開　高学年』東洋館出版、2018年、pp.88-91。
34）坂本哲彦著『小学校 新学習指導要領 道徳の授業づくり』明治図書、2018年、pp.110-114。田村敏郎「森の絵」永田繁雄、和井内良樹編著『板書で見る全時間の授業すべて　特別の教科　道徳　小学校高学年』東洋館出版、2020年、pp.78-79。
35）酒井真依「森の絵」加藤宣行編著『道徳授業を変えたい！と思ったときにまず読む本』東洋館出版、2021年、pp.127-137。
36）「子ども会のキャンプ」『きみがいちばんひかるとき　小６』光村図書、道徳教科書。
37）小中理司「集団の中の自分の役割を自覚し、協力して主体的に責任を果たそうとする児童を育てる」赤堀博行監修『道徳の時間の特質を生かした授業の創造』教育出版、2011年、pp.112-119。作品は同じであるが、諸事情で人物名が変わっている。本論では揃えた。
38）「町内会デビュー」『中学校道徳　読み物資料集』文部科学省、2012年３月。
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/doutoku/detail/1318785.htm (2025.1.12)
39）松原弘「町内会デビュー」横山利弘監修『楽しく豊かな「道徳時間」をつくる』ミネルヴァ書房、2015年。（なおこの論文は自主自律という価値に焦点を当てている。）
40）星美由紀「町内会デビュー」柴原弘志編著『中学校１年の道徳授業　35時間のすべて』明治図書、2019年、pp.104-107。
41）川野哲也「読み物資料に基づく道徳授業の考察（５）　価値『規則遵守』『正義』に焦点を当てて」『山口学芸研究』第14号、2023年、pp.1-13。
42）価値を伝達するのではなく子どもが主体となって価値を創造する、というものである。例えば以下を参照。田沼茂紀編著『道徳は本当に教えられるのか』東洋館出版社、2023年。